令和６年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立白幡中学校 ）　　学校番号　２０８

【様式】

目指す学校像	生徒が夢や希望をもって主体的に学び、豊かな自己実現を目指せるよう、教職員がきめ細かく支援する学校

重点目標	
	1 「教える」から「生徒が主体的に学ぶ」授業への改革 アクティブラーニングの推進と情報端末活用の推進 2 生徒指導・教育相談体制の充実　安心・安全な学校に向けた環境整備及び防災教育の推進 3 地域との連携強化 これからの白幡中学校を見据えたコミュニティースクールの充実 4 一人ひとりが力を発揮し、お互いから学び合い、成長できる教職員研修の充実

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和　年　月　日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	（現状） ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、国語・数学ともに全国・市平均と比較し、概ね良好。 ○日頃の授業態度は良好、学習にしっかり取り組む生徒が多い。 （課題） ○指示されたことはしっかりできるが、自ら率先して疑問をもち課題を解決する意欲は高くない。 ○特別な支援を必要とする生徒に対する適切な対応について特別支援学級の担当者と連携して指導を行うことが必要である。	・「学びの指標・主体的な学び及び、探究的な学び」の肯定的評価を向上させる授業を行う。	・全国学力・学習状況調査の自己採点、定期テスト等結果の個人評価から、生徒が自らの学習状況について把握できるようにする。 ・「特活を要としたキャリア教育」の推進により、生徒一人ひとりが自己の課題を意識した学習に取り組む姿勢を身に付けさせる。	・生徒が自己採点の結果を基に、自らの学習状況を把握し、目標を立て、達成に向けて努力できるようになったか。 ・生徒が自己の課題を意識できる、フォローアップタイムを実践、改善したか。 ・生徒が自己の特性や、課題を発見し解決するために積極的に取り組むことができる授業実践ができたか。	・本校はどの項目も全国及び市平均を上回っているが、その中で課題としては国語「我が国の言語文化に関する事項」、数学「関数」をそれぞれ上げ、教科において確認を行い、成果を共有し次の課題作成に役立てている。 ・定期テスト前にフォローアップタイムを実施し、個の課題について学習に取り組み、教員が寄添い指導した。生徒が自分で課題を考えることで、意欲的に学習に取り組むようになった。 ・キャリア教育推進のため、失敗を恐れず挑戦できるよう、理想の学校像、生徒像の設定を行った。	B		
		・支援策の提示、対応を行い、常に効果を確認する。	・特別支援教育コーディネーターや、特別支援学級担当者による授業見学を実施し、必要な支援策について協議する。	・一人ひとりの生徒に最適な学びを提供するための協議を行い、改善を行うことができたか。	特別支援教育コーディネーターを中心に、生徒の観察や検討及び保護者面談等協議を行い、SA をつける、通級指導を実施する等、一人ひとりへの対応を行うことができた。	B		
2	（現状） ○昨年まで不登校だった生徒の中で、新学期より進級や進路決定を意識し、頑張って登校している生徒が複数いる。 ○各担当者による安全点検の確実な実施と管理職、用務員による点検を実施しており、危険個所の把握及び対応はできている。 （課題） ○自身や家庭の理想と現実のギャップによるストレス及び、自己肯定感を認められない生徒が相談し教員が支援できる体制づくり及び、外部機関との連携。 ○Sola るーむを活用する生徒への、適切な対応の検討を進める。 ○危険個所等の早期発見と適切な対応の判断、校内措置及び、市教育委員会と連携した対応の実施。 ○避難所運営訓練への参加等によるこれから起こりうる災害等への学校全体の対応力の強化。	・生徒一人ひとりへの細やかな寄り添いができる若い教職員の生徒指導、教育相談技能育成とリーダーの育成。 ・Sola るーむ環境について生徒の意見が生かされている。	・日常会話を大切にし、相談しやすい人間関係作りを学ぶ。生徒に徹底的に寄り添い、聞く技術を身に付ける。 ・気持ちのよい挨拶を推奨し、人間関係作りを支援する。 ・いじめの早期発見、早期対応。不登校生徒のへの早期対応。 ・Sola る一む当初レイアウトについて、生徒と意見交換を常に行う。	・通常の生活の中で意図的な会話を行い、生徒の状態を理解しフォローアップする力を身に付けることで、生徒から相談をする機会が増えたか。 ・教職員同士で声の掛け合いを行い、互いを支えまた、フォローが必要と思われる生徒への発見、指導のアドバイスができたか。 ・Sola るーむを利用する生徒に寄り添い、学びやすい環境について力を合わせて創ることができたか。	・教職員と生徒の指導外の会話が多くなり、普段の生活の様子を日常会話として理解できることが多くなった。結果として生徒が教員に相談する機会が増え、また生徒の変化に気づいて声をかけることができ、相談の件数は増加したが、初期段階で対応できる割合が高くなった。 ・教職員による生徒の情報共有の徹底により、職員間の会話が増え、授業等の意見交換も増えた。それにより、生徒への対応等のアドバイスもより行われるようになった。 ・Sola るーむ利用生徒に必ず教職員が対応することを徹底し、家庭との連携もとることができるようになった。	A		
		・安全な学校生活に主体的に取り組む生徒の育成に向けた教育活動の充実。	・職員による施設設備の定期的な安全点検確実に行う。 ・保健委員会を中心に、校内におけるけがの発生場所、件数、原因等を分析し生徒と結果を共有する。 ・防災教育を「STEAMS 教育」や「SDGｓ」の取組の中に取り入れ、各学年において段階的、計画的に取り組む	・施設設備の不良による事故を昨年度より減らす。 ・保健委員会の生徒アンケートで、自ら危険を予測や、回避の心掛けについての項目の肯定的回答が優位となる。 ・防災に関する取組の生徒アンケートで、意識の向上、積極的な活動についての項目の肯定的回答が優位となる。	・施設設備の老朽化等、課題はあるものの、故障、破損等への対応を速やかに行った結果、施設設備の不良による事故、けがの発生はなかった。 ・保健委員会を中心にして危険個所特定の徹底や、事故防止の呼びかけを行いけがの発生は大きく減少した。また、睡眠の重要性を理解する取組も始めた。 ・防災について３年生と１年生が共同して学ぶ取組を行い、意識の向上等について肯定的回答が増加した。	A		
3	（現状） ○学校と地域の連携、生徒の地域活動への参加等、昨年度の取組は、部活動単位及び、個人参加合計で前年度を大きく上回り、意識の高まりを地域にも理解していただき、成果を上げた。 （課題） ○学校だよりの配布、HP 更新による、情報発信の充実。 ○学校運営協議会での充実した「熟議」のためまた、生徒の学ぶ様子を保護者が理解するための学校公開・学校公開期間の実施。 ○学校の教育活動、地域活動のさらなる連携のための情報共有と協議の実施。 ○これまで実践した「地域で目指す生徒像」の学校・家庭・地域に広く周知するとともに、短期的、長期的な取組について、学校、家庭、地域の考えを共有し実践のための協議を行う。	・目指す生徒の姿を地域全体で共有し、生徒の自律につながる取組を行う。	・HP、学校だより、学校運営協議会等あらゆる場面で広報し、目指す生徒の姿を広く共有する。 ・学校公開を積極的に行い、実際の様子を保護者、地域に伝える。 ・地域のボランティア活動等に積極的に参加し、自分の考えで地域の一員として活動できる生徒を育成する。	・「目指す生徒像」を HP、学校だより、学校運営協議会等あらゆる場面で発信し共有できたか。・学校公開を行い生徒の取組について保護者・地域の理解を得ることができたか。 ・活動後の生徒アンケートで、地域の活動に協力することについての項目の肯定的回答が優位となる。	・目指す生徒像について、教職員で検討、また生徒、保護者アンケートを実施した。白幡中学校の目指す学習者像について継続検討している。 ・毎月、学校公開期間を設け授業の公開を実施した。周知について継続が必要である。 ・学校地域連携コーディネーターを中心に地域活動への積極的参加を呼び掛けた。多くの生徒が参加し、地域貢献を認められ達成感を味わったと回答があった。	B		
		・これからを生きる白幡中生徒のために必要な支援について学校、家庭、地域の考えを共有する。	・これから考えられる課題について、話し合い地域として学校との連携の方法を協議する。 ・学校を離れた活動への地域との連携について協議する。 ・失敗を恐れず主体的に学ぶ生徒の育成を行う学校・地域創りについて検討協議する。	これからの白幡中学校区に生活する生徒とって課題を取り上げ、共有できたか。 ・今後、放課後の活動について、学校と地域が連携して進めていくことが必要なことの理解が深まったか。 ・失敗をしてもそれを生かして、成功を導く意欲をもつことができたか。	・家庭での評価の判断基準に学年順位が用いられる傾向が強く、そうではなく理解度が大切であることを伝えているが浸透させることが難しいと感じている。 ・部活動や、フォローアップタイム等教職員だけでなく地域の方との連携により、より充実した体験や学びができるとともに、本校の防災学習のように放課後だけでなく教育活動全般において地域との連携の必要性を教職員も生徒も理解することができた。 ・失敗を怒らず、そこから何を学んだか、何が必要かを考えさせることでチャレンジする姿勢は高まりつつある。家庭にも浸透させるよう方策を検討している。	B		
4	（現状） ○エバンジェリストを中心とした、情報端末、タブレット等 ICT 機器の活用について職員研修意識が高まりつつある ○個別最適な学びに迫る方法を検討している。 ○自動採点システムの活用により、生徒の「強み」「弱み」をより把握できるようになった。 （課題） ○ICT 機器の活用のための環境整備と教員数に対するエバンジェリスト数を充実させ、不明点を質問できる雰囲気の醸成が必要。 ○積極的な授業公開と授業見学等、素晴らしい取組みお互いに見合えるシステムを構築する。 ○スクールダッシュボード(SD)を活用し、生徒の様子をより把握するとともに、おはようメーターと教員の感覚の違いを把握する。	・「個別最適な学び」の実現を目指し、教職員一人ひとりが力を発揮し、学び合い成長できる研修を実施する。 ・「自分の子どもに見せたい先生としての姿」と「自分の子どもに受けさせたい授業」を実践する。 ・SDを生徒の指導に生かす。	・校内研修計画に従い、ICT 機器の活用について理解を深め、従来の「一斉講義型授業」から「個別最適な学び」への転換を図る。 ・ICT 機器を活用し、特性や学習進度、到達度に応じ、学習方法の選択肢を用意する。「指導の個別化」や、「総合的な学習の時間」等を活用し、生徒が自分の興味関心があるものについて学習テーマを選び、探究的に学ぶ「学習の個性化」の推進について研修を行う。 ・自動採点システム等を活用し、生徒の全体的また、個人の強み弱みを分析、そして教師の指導の強み弱みを理解し、それぞれの課題に応じた課題解決への取組を実施する。 ・SD と自身の感覚の違いがある時にも生徒に声をかけ、生徒が安心して生活する助けをするとともに、自身の生徒理解の力を向上させる。	・ICT 機器を活用し、調べ学習や発表等を行う機会が増加し、生徒のまとめ方、発表の仕方が向上した。相手に伝えるためのポイントの見つけ方、違いの伝え方等伝え方の工夫により、調べ方が向上し、視野の広がりによる理解の深度も高まった。 ・スタディサプリなど ICT を活用した学習の方法により、生徒が自分に必要な学びを選択するようになったか。また、自身の良い面を伸ばそうとするか、苦手な面を克服するかの考え方等生徒による選択が一律ではなくなってきたか。 ・システムの活用により、生徒の特性を発見する機会が増えるとともに、教職員の指導の課題等も教職員自身が理解し、改善に努める姿が目立つようになったか。 ・SD の活用により、教員の生徒を理解する力を向上させることができたか。また、生徒の不安について見過ごしを防ぐことができたか。	・プレゼンテーションの機会が増え、発言の仕方、視覚への訴え方の工夫などを体験し、知らない人への伝え方の難しさを理解し、より分かりやすい伝え方を考えるようになった。 ・家庭学習の習慣が身についていない生徒が ICT により楽しく学習する方法を身につけることができたとの回答があった。また、ICT 活用により、より多くの問題に取り組むことができ学びが高まったとの回答もあった。 ・自動採点システムにより、採点ミスの減少、採点時間の縮小ができ、生徒の理解度の傾向の分析、全体及び個人の学びの傾向の理解が進み、サポートがより活発になった。 ・スクールダッシュボードの活用により、教職員の生徒を見た際の印象と、実際の意思表示のズレの有無の確認ができ、より生徒の理解を深めることに繋がり、生徒とのコミュニケーションが活発になった。	B		